
海からの少女

トゥカチンチラ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

海からの少女

【Nコード】

N3655Z

【作者名】

トウカチンチラ

【あらすじ】

これから起きる悲劇に関する序文。

序

この物語は紛れもないフィクションである。従って時代は過去・現代・未来……いつの時だろうと構わぬ。

また、出来事の起きた国もさして重大なものではない。ただ、起きた場所は孤島であるということ念頭に入れておけばよい。孤島……といっても絶対的な、それこそ「ロビンソン・クルーソー」のように前人未到のような孤島ではない。とある国に属したものであり、その国との行き来も一般的な船を使えば30分でできる。

こいずれにせよ、これはその孤島で起きた「理想的な悲劇」を物語化したものである。

朝（前書き）

朝、一郎、二郎、竜也の三人は目を覚まし、海へと行く。

朝

「……郎……郎」

ウトウトしている二郎に、一郎が声をかける。

「二郎。二郎」布団の上でまだ目を半分しか開いていない二郎に対して、一郎が肩をゆする。

「起きろ二郎、朝だぞ」

「う、うん」あくびを噛み殺しつつ二郎が反応する。

「さあ、起きろ。起きて海で顔を洗ってくるんだ。」

「うんわかったよ。お兄ちゃん。」

「さあ、わかつたんだったらさっさと行くんのだ。」

二郎が部屋から出て、下の階におりる。布団を片付けながら下の階で聞こえてくる会話に、一郎は耳を澄ます。片方の声は凶太い。

「おお、二郎。起きたか？」

「うん、お父さん。」

「よし、海に出て顔を洗ってこい。今日はいい天気だ。」

「うん。丁度これから行ってくるころなんだ。」

「出来るだけ早く戻ってこいよ。朝飯の準備ももうそろそろで終わるから。」

「わかつたよ。」

会話が終わったと思ったらパタンとドアが閉まる音がする。その後、凶太い声の行先は一郎になる。

「どうだ一郎？布団の片付けは終わったか？」二階からでもかなり鮮明に聞こえる。それほど声の音が大きいということだ。

「まだまだよ親父。今やっているところ。」

「何？まだ終わってないと言ったのか？なら早く終わらせて下に降りて来い！！朝ごはんにするぞ。」

「わかつたよ親父。」

「急げ！！二郎が戻ってきたらすぐに飯にするぞ。」やはり親父の

声は大きく、図太くそれ故鮮明である。

「わかつたつてば。」

(やれやれ、急がないと)と親父に怒鳴られるのを危惧した一郎は、手の動きを速め、布団、シーツ、ブランケットを急いで折り畳み、片付ける。丁度最後のシーツをたたみ終わったところで、二郎のやや甲高い声が下から響いてきた。もつとも響いてきたといつても、親父のそれに比べれば雲泥の差ではあるが。

「ただ今。顔を洗ってきたよ。」と顔を濡らしながら、ドアから二郎が入ってくる。

「おお、帰ったか。おい！！一郎！！！」怒鳴り声が家中に響く。

「今行くよ！」負けじと一郎も大声を出す。とはいえども、どちらに分があるかは明確だったが。それはともかく、一郎は下に降りたすると、身長はさして高くないが、肌の焼けた、筋肉が逞しく、シヤツ一枚とハーフパンツの男がいた。

「おお、お早う一郎」

「お早う親父。」

「昨夜はよく眠れたか？」

「ああ、何とか寝られたよ。」

「よし！！朝飯にするぞ！！今日の朝は海に生きる男らしく魚だ。

ほら、二郎も！ドアのところであつた立ってないで飯だ！！」

「うん。お父さん。」

三人とも居間にある机に向かう。机は丸い形をしており、正座をして食事をするのに適している程の高さである。机の上には、御飯、秋刀魚、ハマグリの入った味噌汁となつている。しかし、御飯の盛り付け具合、秋刀魚の粗のある焼き方から見て、それは料理が下手というよりも、よく言えば男らしい、悪く言えば荒々しい朝飯の出し方であるといえよう。

ここでちよつとこの家、および三人が座っている机を初めとした家具について説明したい。

まず壁は丸太による木でできていることから、この家は木製の家で

ある。そして二階建て。一階には親父、名前を矢口竜也、の部屋があり、二階には二人の息子である一郎と二郎の共同部屋がある。(もつとも、二階といつてもどちらかというとその大きさから屋根裏といった方が正しいが……)一階には竜也の部屋の他、居間・台所・トイレがあり、居間が専らの三人の共同空間といつていいだろう。もつとも居間には必要最小限のものしかない。今ここで三人が座っている机の他、木製の椅子が2つ、暖炉、戸棚がある位である。インテリへのこだわりが微塵にも感じさせない部屋である。窓も一つあるつきりであり、今は窓から朝の陽ざしが漏れてきている。

もし、インテリらしきものをひとつあげよ、と言われたら壁にかかっている一枚の肖像画である。肖像画には女性が載っている。この女性は30代くらいの長髪であり、やや肉がついている。そして何よりの特徴として、女性であるにも関わらず、見るものに「たくましさ」という概念を連想させるのである。その顔にはどこか強さを感じさせるのである。その肖像画に、箸を握り魚に手を付けようとしながら、一瞥を竜也がくれる。

三人は机上の料理に手を付けながら、もくもくと箸を動かす。やがて竜也が相も変らぬ凶太い声で、一郎に話しかける。

「一郎。朝飯を食べたら早速海に出るが準備はいいのか？」

「おお。大丈夫だよ、親父。」

「お前はもう15歳だ。そろそろ本格的に漁業の訓練を重ねて、家系を継いでもらわないとな。まだ6歳の二郎にはまだ漁の訓練は早すぎて、家で居留守をすることになるがな。」

「わかつているよ。そう毎朝毎朝いわなくてもさ。」

「ふふ。逆に俺はもう51だ。老い耄れといつてもいい頃さ。やはり寄る年波には勝てなくてな、最近肉体の衰えが感じつつあるな。」

「何言ってるんだよ。親父はまだまだ十分現役だつて。」

「いや、そんなことはねえ。毎日仕事しながら、自分の肉体の衰えをいやでも感じつつあるんだ。だからこそだ、一郎、お前にはな。」

おさらの事頑張ってもらわねえとな。俺がいなくなったら、一体誰が俺らを養うんだ？俺は別にもう十分生きてから、死のうと鎌わねえが、二郎は一体誰が育てるんだ？わかってると思うが、家の主つてのは強い人間じゃないと務まらねえ。」とここで、またもや壁にかかっている女性の肖像画に目をくれる。

「強い、逞しい人間じゃないといけねえ。そしてお前がその強い、たくましい人間にならねえといけないんだ。だから俺がこうしてまだ現役である間に特訓あるのみだ。わかったな？」ドンと強く一郎の肩をたたく。

「わかつてるよ。もう耳にタコが出来るくらい聞いたつてば。」
「いつものことのように一郎は軽く受け流す。強く叩かれた肩も平気のようだ。」

「死活問題だからさ。それに年をとると、何分説教臭くなつちまうからな。ところで二郎！！」

「うん。」二郎が静かに竜也の方に顔を向ける。

「俺らが海に出ている間、わかつているな？」

「うん。さつきも言ったけど、お留守番でしょ。わかつているよ。」

「よし、わかつてりゃ、それでいい。」と竜也は元気よく頷き、二郎の背中をポンポン叩く。

再び沈黙。三人ともまたもや黙々と箸を進める。そして三人全員が食べ終わったら、

「一郎、それじゃそろそろ行くぞ。」と着替えて壁にかかっているコートを着ながら一郎を促す。

「ああ、行こうか、親父。それじゃ二郎、後は頼んだぞ。」と一郎もコートを着る。

「うん。」と二郎は一郎をじつと見つめる。

「じゃあな。」と二人は外に出る。

外に出たら、すぐそこに海があった。そして海はどこまでも果てしなく続いている。これからこの二人は海で漁をしようというのだ。ここは孤島である。半日もすれば島全体を遊歩することができる

孤島である。といつても、「ロビンソン・クルーソー」のような前人未到の絶対的な孤島である、というわけでは決してない。船を使えば30分程で陸に行くことができ、事実竜也は毎日の漁業帰りに陸に行っていた。というのも、捉えた魚を陸の市場に持っていく必要があるからである。島に訪れる人間もいないわけではない。とはいえ、孤島であることに変わりはない。つまり、住んでいるのは竜也、一郎、二郎の三人しかいないのである。

「さつきまではいい天気だったのに、雲行きが怪しくなったな。」
と、訝る竜也。実際、空を見上げて見ると朝の日差しは薄まり、雲が空を覆っている。

「雨が降るかな。」
「さてな。いいか？例え嵐が起きたところで、それも一つの経験だと思え。なーに、心配すんな、ちよつとやそつとじゃ、俺の船は壊れやしねえ。」

「それは重々承知さ。」
「よし行くぞ。」

と、二人が歩いて行き着いたのは、鉄の船。全長15メートル程ある、確かにちよつとやそつとじゃ壊れそうもない船である。

「乗るぞ。」

「ああ。」

二人して船に乗り、海へと赴く。

海（前書き）

竜也と一郎は二人で漁の為に海に出た。

海

海に出た二人。先ほどまでいた島もみえなくなり、また、船に乗る際に感じた潮の匂いも感じなくなる。辺り一面にはただ水があるばかりであり、時折かもめが空で鳴く声が聞こえる。空は雲が太陽を遮断しているような状態であり、明るい灰色という表現が適切である。

舵取りがデッキにあり、親父が舵をとっており、その側にくつつく形で一郎がいる。

「いいか一郎？今までは一緒についてくるだけだったが、今日からはお前も実際に漁をやるんだ。」

「わかってるよ、親父。今日から俺も手伝う。一人前になるようしつかり訓練するさ！」

「おお、その意気だ。それじゃあ今日は実際に網をやってみよう。わかるな？タイミングを見計らって魚網を海に投げ込むんだ。いいな？タイミングを間違えるんじゃないぞ。そしていったん投げて、獲物がある程度食いついたと感じたら、急いで引き揚げるんだ。」

「わかった。」と頷く一郎。そして一郎は船内にある大きな魚網をせつせと運んできた。だがまだ筋肉、体質が育ち盛りの一郎にとっては、網に運ばされた、といった感じだが。

「持ってきたよ、親父……それでこれをどうすればいいんだ？」

「俺が「いい」というまで待つてる。今から魚がたくさん獲れる所へ連れてってやる。そこで網を投げ込むんだ。」「わかってるよ……じゃ待つてる。」ただ一郎は黙ってうなずくばかりである。

船は移動する。大海原をどこまでも。見えるはただ海ばかり。だが何も、常に海原においてポツンとただ一隻の船、というわけではない。時には島も遠くから見えない事もない。長年海に生きてきた

竜也のことだ。きつとああいった島についてもその名前、地図上の位置、住民について理解しているに違いない。その島をどこか悲しそうな目で見る。

「見えるか……一郎？」とさもありがちに一郎に声をかける。

筋肉質でたくましい親父が、ときおり悲しげになることは、一郎ももう慣れてきているため、さして驚かない。こういう場合はただ必要最小限の「見えるよ」という返答で十分である。

「あの島には……いやあの島に限ったことじゃないが……知り合いが何人かいた。だが……もう多くのものも死んでしまった……。何故かわかるか？」

「……」クビを振る一郎。

「海に吞まれた奴もいれば、寿命で死んだ奴もいる。この目で直と亡くなる時の者を見た奴もいる。人の生命なんて儂いものさ……。覚えておけ、俺らの今こうして感じ取っている息吹もまたいつかは、それもあつという間に枯れてしまうことをな……」

「……」

「そして、くどいようだが、最初に枯れるのは俺の方だ。だから頼むぜ一郎……しっかりと一人前の海の男となってくれ。」そう、舵を強く握りつつ、一郎の方ではなく、真正面の海を見ながら、いつもの凶太さで大きいさはないもの力強く述べた。

「なってみせるさ。母さんもそれをのぞんでいたんだ。俺が一人前になって、はやく二郎のやつも立派に育ててやらないと。」

「（忍……か……本当に生命なんて仮初のものみたいだな）よし！！わかってるんだな。その意気だ。」いつもの声の大きさを取り戻す。

そして竜也は船を止める。どうやら網を引き下ろす場所についてようだ。

「よし！！一郎、今から網を海に下ろしてもらおう。いいか、タイミングは今回は俺がいう。」

「……しばらく時間が空く……」よし今だ！！

一郎が網を海の中に投げる……いや投げ入れようとする。しかし突然竜也がおそいかかってきて

「ばかやろうー！」そうげんこつを一郎の頬に浴びせる。それを受け一郎は顔を横に向けながら頬を手で押さえる。

「投げ込む際の、網の向きが逆だ。これじゃ、魚一匹とれっこしねえぞ。もう一回だ。」と相手に怒鳴りつける。それを涙を必死になつて抑えながら聞く一郎。

「もう一回だ。」

網の向きを逆にして、おそろおそろ網を海に投げ込む一郎。

「よし、それでいい。」

竜也の肯定の返事か、一郎の気が緩み、手の握りが弱まった。すると

「ばかやろうー！手を緩める奴がいるか！！お前が網に引っ張られて海におっこちたらどうするつもりだ？」

やはりまたもやの怒声を受けて、一郎は手はおろか、全身を引き締める。

「一郎、覚えとけ、海っているのは恐ろしいところだ。いつどんなハプニングで危険がやってくるかわかるもんじやねえ。」

必死になつて手を握りしめながらも、頷く一郎。だが、魚が網にたくさんかかったようで、握りしめるのがきつくなつてきたのが、一郎の顔色からわかる。それを察した竜也は、自分も網を握りしめるのを手伝う。

「よし、そろそろいい頃合いだ。引け。」

力をこめて引っ張ろうとする一郎だが、なかなかひけない。歯ぎしりしながら必死になつて、引っ張ろうとする一郎。だが船にまで引っ張ってくるのは難しい。

「仕方ねえな。一郎。筋肉トレーニングをしっかりとやっつけ。」と竜也の頭を軽くなぐりつつ（といっても一郎にはかなり痛かったが）自身も手伝う。

.....

無事魚も引き揚げ、船内へと移す。そしていよいよあの孤島に戻ることにした。だが灰色の空からも予期することができたように雨がポツポツと降ってきた。その事には一向に頓着なく

「よし！一郎。今日はもう十分に獲った。帰るぞ。」

「了解だ、親父。俺にもう手伝えることはないかな……」と先ほど殴られた頬のアザをさわりながら応答する。

「ねえよ。特に。」

「しかし、今のままじゃ全く俺は役に立っていないくて……」

「いいんだ。気にすんな。これから徐々に覚えてこう。俺も最初はお前みたいなもんだったさ。」とニツ、と陽気に竜也は笑う。

一郎はそれを情けなさ気に見る。

さて、相も変わらずポツポツと降っている雨だが、その度合は次第に強くなっていく。「ポタン、ポタン」という細切れの音から「ザーツ」という一筋の音へと変わっていく。

「雨がよいよ降ってきやがったな。海も大分荒れてきた……」

「と、海を観察するかのようにあたりを観望する。そして視線を辺りの海から、一郎へと移す。見ると次郎が不安そうな顔を始めていた。

「どうした、一郎。顔色が悪いぞ。」

「……なんでもない。気にしないでくれ……。」と先ほどとは違い、声のトーンを沈めて返答する。

「そうか？お前怖いんじゃないのか？」と、嘲っているのではなく、真剣にたずねる。

「……」それに対して一郎はまともな返答せずに、ただ黙って下を向くばかりである。

「嵐が来ること。それが怖い。そうじゃないのか？」

「……」やはり俯いたままである。

「正直に答えろ！！！！」雨の音を突き破るような凶太い声で怒鳴る竜也。

「……うん。」やはり暗いトーン。

「……つとすまねえな。一郎。……気にするなって。怖がることは決して恥じゃない。」

「うん……わかってるけど……やっぱ雨や嵐が……次第に雨がどんどん強くなっていく。」

「さつき海に出る前に言っただろ？これ位の雨じゃ、この船はびくともしないって」

「……うん。」

「それに俺がついている。心配すんな。」そう一郎の頭を撫でながら、優しい声で慰撫する。しかし次の瞬間一転して

「だが一郎、怖がつていいのは最初だけだ。漁だつて下手でいいのは最初だけだ。いつまでもその状態じゃ、ま、口うるさいだろうが、二郎を養えないからな。」

「……うん。」

雨が更に強くなる。波しぶきもあがり、それが船舶のデッキへと流れてくる。

「大丈夫……だよな？」

「大丈夫だ。俺を信じろ。」

竜也親父はこの状態の中。ひたすら舵を握り前をみる。仁王立ちである。その様子から、雨も嵐も波しぶきも、この人間にとっては恐るるに足りない存在なのであろう。

一郎はその親父の腕をしっかりと両手で握った。固い。例え何がかよつともビクともしなさそうな固さである。まるで、豊穣なる大地に深く根を張った木のように。一郎は親父の顔を見た。親父がただ真正面に航路をとることしか頭になさそうな親父の横顔を見上げた。そして思った、いつか自分もこういふ海の男になることができたらな、と。

帰宅（前書き）

海へと赴いていた竜也と一郎は家へと帰宅する。

帰宅

「ただいま。」と一郎が少しさわやかにドアから入ってくる。

「お帰り、あんちゃん。」と二郎が迎える。

「おお！！ただいま。二郎元気だったか？ちゃんと留守番していたか？」と今度は竜也がドアから入ってくる。

「うん、留守番しっかりしてたよ。片づけも、洗濯もしっかりとやったよ。」

「おお！！偉い。偉いぞ」と二郎の頭を撫でる。

「お父さんの方こそ、どうだったの？朝の天気の高さとは一転して、途中大雨になったけれど……。」

「大丈夫！大丈夫！その程度の雨じゃ、俺たちはビクともしないつて、な、一郎？」

「……ああ、そうだよ。親父がいれば、俺たちなんてほんとビクともしないさ。」

「??、どういうこと。」と意味がわからなさ気な二郎。

「何、お前も大きくなればわかるさ。」とまるで悟ったかのような一郎。

「よし、飯にすつぞ。今日は腕によりをかけて作るからな。二人とも気合入れてかかれよ！！」

「おお！！」と元気のいい二人の声。

そして夕食にて。

「二郎？」と竜也の図太い声が食事を一時中断させる。

「うん？とつちゃん？」

「お前は将来どうしたい？」

「え……どういうこと？」とキョトンとした表情で二郎が答える。

「将来どうしたいのかって、聞いてるんだ。」

「う……うん。海に生きる男になるんじゃないの？魚をた

くさんとしてさ」

「それは本心か？」

「本心だよ。いつかとっちゃんのようになりたい。海に出れる一郎あんちゃんが羨ましいよ！！」と二郎は微笑む。

一郎は箸も動かさず、ただ黙って下を向く。さっきまでのさわやかさが消えたのは、自分の未熟さと二郎の羨望のギャップを感じたからであろう。

「そうか・・・海に生きるっていうのは想像以上に厳しいことだぞ。いいか、今の内に覚悟しとけよ！！」と励ますように竜也は喋る。その声はどちらかというと、一郎にも向けられているみたいである。

「うん！！」と二郎はやはり微笑む。

「よし・・・一郎。箸が止まっているぞ。食うんだ。明日もまた厳しいぞ！！」

「・・・ハイ」

「よし、食べてゆっくりしたら、寝るんだ。明日もまたがんばるぞ！！」

3、4時間後屋根裏にて。

「あんちゃん？」と横になっている二郎が一郎に視線を合わせる。

「ん？」両腕を頭の後ろに置きながら目を閉じていた一郎も、二郎に対して視線を合わせる。

「さっきのどういうこと？ほら父ちゃんがいる限り俺らがビクともしないっていうのは？」

「いや？大した意味じゃねえよ。ただ親父は強いつて・・・

そういうことさ」

「ふーん・・・変なの」

「何だよ！」

「だって、いつもわかりきっていることをさ、何でまた急に言い始めるのさ。」

「いや・・・今日親父と海に出て、改めてそう思ったのさ。」

「ふーん」

「強いぜ、俺たちの親父は。海に生きるといふよりも、人生を生きるって男という意味でさ。なんか毎朝、俺も寄る年波に勝てない、といっているけど、ありや当分まだまだ現役だぜ。二郎もそう思うだろ？毎朝あの元気のいい親父が引退して、くたばっちゃうなんて考えられないだろ？」

「・・・・・・・・・・」

「二郎？」

「・・・・・・・・・・」

「おい？二郎？」

「・・・・・・・・・・スヤスヤ」

「ふー。もう寝てしまったのか。子供は気楽でいいや。(・・・・・・そうさ、あの嵐の中で仁王立ちした親父がいる限り、俺たちもビクともしない・・・・・・ビクともしないのさ)」

そう心の中で強く確信したように思った一郎もまた、間もなく瞳を閉じ、睡眠に入った。

場面変わって一階。誰もおらずただ沈黙があるばかりである。そんな中、女の肖像画が殊更な存在感を放つ。その茶色い瞳が暗闇の部屋を射抜き、口元の微笑みがあたたかく誰もいない部屋を見守るような形である。そこでドラが開き、入ってきた竜也が女性の肖像画に目をやる。

「(なあ、忍。二人の子どもはいきいきと育っているぜ。お前が死の間際に述べた、二人の子供を頼むって言葉、俺はしつかりと守っているつもりだ。とはいっても、まだまだヒヨッコだがな。みてな二人とも立派な海の男にしてみせるぜ。そしてお前みたいな強い人間に育ててみせる。お前は女だった。だが強い女だったのは俺が一番知っている。どんな時にも音を上げなかった。自分の意見は決して曲げず、かといって融通がきかないってわけじゃない。子供を産むときも悲鳴一つあげず、家事も文句ひとつということなくやった。そういうところを俺はお前が好きだった。そういう強さを俺は信頼

していた・・・お前が・・・そうだな・・・お前が・・・
・・・お前が生きていてくれたらな。」
そうして竜也はボタンと居間のドアを閉めた。

歌声

「一郎、準備はできたか？」

「おお。出来たよ親父。」

「よし、今だ、投げ込め」

「そりゃー！」威勢のいい声とともに、網が海へと投げられる。海へと投げ込まれた網をしっかりと握りながら一郎はまたもや「それー！」という風に威勢のいい声で網を引き揚げる。大魚である。

「よっしゃー！一郎、今日もよくやった。」

「ありがとよ。親父。それじゃあ、この魚達を船内へと持っていくよ。」と、網を引きずりながら船内へと一郎は入っていく。一郎の腕が心なしか太くなったようである。その一郎の背中姿を追いながら竜也はひとり思う。

「（一郎。船に出始めて今日でちょうど一年。随分と漁が上手くなったな。この程度でお前が成熟した、などとおだてあげるつもりはねえ。お前がいつぱしの海の男になる道のりは遠いんだ。だが、その歩みは着実だ。忍、喜べ、お前と最期に取り交わした約束、もう何割かは守られつつあるぞ。．．．）」

そついう感慨深い想いが頭の中を駆け巡っていた中、竜也は耳慣れない音を聴く。

「（．．．．．ん。何の音だ．．．これは）」

いや、「聴く」という単語を使用するのは間違っていると言えるだろう。遠い、遠い、遙かな場所から運ばれてきた音を偶然耳にした、といった方が正しい。

違和感を感じた竜也は、あたりを観望する。

「鷗．．．．．ではないな。周りには鳥が一羽たりともいない．．．．．」

あたりを観望することを竜也はやめぬ。．．．．．と、そこで一郎が戻ってきて、竜也の拳動を訝しげに思いながら訪ねる。

「どうしたんだ……？親父？」

「いや……一郎、何か音が聞こえてこないか？」

「音……？いや……聞こえない……けど」

「そうか……。じゃあ俺の気のせいなのかな。」

「いや、ちよつと待って。確かに聞こえる……。ほんのわずかだけ聞こえるよ。」

「やはりな……。なんとというか……。歌声？誰かが歌っているのか」

「周りのどこかに島があつて、そこで祭りでも開催されているんじゃないのか？」

「いや、確かここは海のと真ん中だった筈だ。島はあたりにはない。というきあ、あたり360度見回したところで、島が一個たりとも見当たらない。」と竜也はあたりを観望し続ける。

「だな……。じゃあ一体何なのだろう……。ひよつとして誰かが遭難したのじゃないのかな。」

「……。かもしねえ。だったら助けに行かないとな。」と、竜也は急いで舵を握り、船の方向を音の先に向けて、走らせる。船を走らせるにつれ、最初は耳の鼓膜に小さな点のように染み付いていた小さな音も、だんだんとその正体が明らかになってくる。二人は耳の鼓膜を突き破るようなSOSの悲鳴を期待していた。だが音の正体はどうやら違うようだ。判然としないが、女性の声みたいだ。勿論、甲高い悲鳴ではない。柔らかい、聴くものが眠りに包まれるような声である。

「親父？これは。」

「わからねえ。それに……。歌？」

船を走らせて、音量が鮮明になるにつれ、二人を驚愕させたのはやはり声は悲鳴ではなく歌声だったということである。一郎は勿論の事、長年海での活動に従事してきた竜也ですら、この経験は初めてであった。何故歌が海原の真ん中に流れるのか？それが遠く離れた俺たちの声に届くように歌うとは。一体どんな歌を歌っているの

か。歌声を発しているのはどうやら女性のようだが、その女性の正体は？同じ同業者の妻が歌っているのだろうか。

それらの疑問が次から次へと竜也の頭へと流れるように押し寄せてきた。だが、それらに対して回答を自分で考え、導き出してもどうも違和感を感じるのである。しっくり来ない、といった方が正しいか。やがて竜也の考えは止まる。「行ってみれば、わかる」そういう結論に達したのである。

だが、竜也の思考が止まったのとは裏腹に、彼の肉体、いや神経といった方が正しいか、は静止していない。ただ前を見て、声の送り主の地点へと船を走らせることについて全力を尽くしていた。

声の音量が次第に大きくなっていく。やがては耳の鼓膜を震わせるところか、体全身を震わせるような音量にまでなる。声主は明らかに女性、そして声質はその大きさとは裏腹に柔らかい、透き通るような声。だが・・・どこか鬱々とした暗さも内包してはいる。

教えて

人間とそうでないものの境界

どこにあるの

教えて

その境界を知る存在

どこにいるの

歌が辺り一体に響く。

「親父・・・これは一体・・・この歌は一体？」

「わからねえ。何かを訴えているのか？」

歌の大きさとは無関係に、歌に込められていた迫力が二人を圧倒した。助けを乞うような、それでいてなお柔らかさを失わないその歌声が二人を震わした。

「・・・」二人は沈黙した。二人は心なしかどこか魅了されたのだろう。

茫然と立ち尽くす二人であったが、それでも歌声は流れていった。
どこまでも。どこまでも。二人の驚愕をまるで無視しながら。

女と少女（前書き）

歌声の持ち主は海の女だった。その女から少女を貰い受ける。

女と少女

やがて、歌声は止みはじめた。身体全身を揺るがしていた歌声も、次第に小さく小さくなつて行き、やがては聞こえなくなる。

「親父……歌声が止んだが、一体なんだつたんだ？」

「わからねえ……何か助けを求めていたような歌声だが……一体。」

二人の驚愕を他所に、海はただ静かに流れる。快晴の太陽に静かな海が、先ほどの大きな歌声と大きな対照を為している。

すると、今度は周りが暗くなる。次第に太陽の光が辺りから消え失せていき、終には漆黒の闇になる。

「(なんだつてんだ周りがみえねえ……)おい、一郎いるか？」すぐ近くにいたはずの一郎の姿も見えないほど暗くなった。

星の明かり一つない、夜を想像していただければ、場の状態を理解していただけるだろう。

「すぐそこにいるよ、親父」と一郎が応答する。

一時の漆黒の沈黙が流れた後、やがて、海から光の筋が出てくる。小さな糸のような筋がやがては大きな光線となる。そして光の玉とともに、その中に成人した女が現れてきた。

「……女？どうして……」

次から次へと起こる謎の現象に驚愕を重ねる二人であつたが、この女の存在は特に度胆をぬかれたようだ。

光の玉に包まれて、海の底から登場した女は、人間の形をした30代後半程の女である。青いセーターに灰色のロングスカートをはいており、人間と間違えられても決して不思議ではない。まあ、もし海底から光の玉に包まれていなかったら、の話であるが。金色のロングヘアをしており、30代後半の顔つきとよく似合う。耳にはピアスをしている。放っている雰囲気は厳かで、落ち着いている。あたかも、聖書を題材にした絵画に登場してきそうな女性である、

「あなたたちですね……私の歌声を聴きつけたのは」

「……あなたは一体。こんなこと長年海に出てもなかった経験だ。」

「……」光に包まれた女は、浮遊しつつ黙って竜也の方にやってくる。そして

「お願いです……この子を……この子を……この子を……」
「……」そのような懇願とともに、一人の少女を差し渡す。

「……この子は一体？いやそれよりもあなたは一体？」

「私はカデン族……」

「カデン族？」聞いたこともないという体である。

「説明している時間はありません……勝手な頼みというのは重々承知です……この子を……この子をどうかよろしくお願いします……」と、女は竜也達から距離をとる。

「お、おい！」竜也は慌てて相手を呼び戻そうとするが、甲斐はない。

「どうかよろしく……よろしくお願いします」そのような聞く者の相手の胸を響かすような懇願とともに、女は再び海の底へと消えていく。それと同時に、徐々に空は明るさを取り戻し、ついには先ほどの快晴へと戻る。歌声もなく、辺りには海の波のざわめきがあるばかりである。

「親父……大丈夫か？」

「ああ、特に何も問題はねえ。だが」

竜也は下を見た。下には少女が一人寝転がっている。少女は10歳位だろうか。一郎は彼女が、二郎よりもやや年をとっている感があることを察知した。少女は先ほどの光の玉に包まれた女の血筋をひいていることは明らかだった。顔つき、なによりも雰囲気が非常に似ているからである。また、髪の毛も金髪である。服は白い絹のような服一枚のようであり、乳房の乳首が透けて見える。一郎は少女の顔に目をやった後、その乳首にも目をやったが慌てて目をそらした。

竜也はひとまず、寒そうな恰好をしている少女を気の毒がり、一郎に船内からコートを持ってくるよう指図して、一郎もそれに従った。一郎が去った後、竜也は少女の顔と身体をじっと凝視した。

「(さて、どうしたものか。この子をお願いします…….と言われても。これはこの少女を育ててくれ、という意味なのだろうか…….だとしたらアリガタ迷惑な話だ。あの女が何者かはまるでわからねえ。カデン族なんて聞いたこともねえ名前だ…….それ以前にあんな歌声、光の玉を見せつけられて、未だにその存在が夢なのかと俺は疑っている。だが、今こうして目の前に先ほどの少女がいる以上、夢のわけがねえ。現実…….あれは紛れもない現実だった。）」

「持ってきたよ、親父。」と、竜也の思考を破るかのように、一郎が声をかけて、青いコートを手渡す。

「おお、すまねえな、一郎。」と竜也は意識を現実に戻しつつ。コートを受け取る。そして受け取ったコートを寝転がっている少女に着せる。少女はまだ眼を覚まさぬ。

「なあ、一郎」

「?何、親父」

「どう思っ?」

「どう思っつて…….さっきの女の人?」

「ああ、本当にあったことだと思っか?」

「正直とても信じられないけど、親父も見たのだったら、やはり本当のことと認めるしかないんじゃないの…….というか俺は未だに信じられないんだけど、この少女の存在がある以上信じるしかないし…….」

「だよな。」と竜也は下を向く。そしてまたもや少女の方に目をやる。

「(だが、一体誰だろうと関係ねえ。こうして自分の子供を置き去りにするようなやつはな。母とその子供というのはこの世における唯一絶対的な絆…….その絆を無下にするやつなんざ最低だ。」

忍は……そうさな忍は無下にすることは絶対になかった。いつも言っていたな、この子たちは私が育てるって……自分の義務を放棄するようなことはなかった……」

「なあ、一郎……」

「うん？」

「この子は……この子は……どう思う？」

「え、どう思うって……何が……」と少しどきまぎしなから答える。

「いや、この子をよろしくってさっきの女が言っていたけど、それはどういう意味なのかと思ってさ……」

「え、ああ……きっとしばらく預かっておいてくれ……とかそういうことを意味するんじゃないの？」と少し拍子抜けに一郎は答える。

「うん？だといいがな……」

「いや、しばらく、ってことはねえだろうな、きっと……じゃなきゃ、あんな大それたことはしやしないさ……。どれだけだ？一体どのくらいだ。この子を頼むつてのは、一体どのくらいの期間あずからなければならぬ……ち、母親としての責任を放棄しやがって。忍は……あの病気さえなければ、放棄するなんてことは絶対になかった。ああして床に臥して、この世を去ることがなければ、決して母親としての義務を放棄するなんてことは絶対になかった！それをあの女はいとも簡単に、この子をお願いします……」

「一郎、舵の取り方はもう覚えたな。」

「ああ、ばつちさ。」

「よし、じゃあいつものように大陸の方にあがって、今日獲った魚を売るぞ。」

「え？でもこの少女はどうするんだ？このままでいいの？」

「このままでいいわけないだろ！！」突然声の凶太さが加わる。

「え、ああ、そうだよな。すまなかつたな親父。」とビクツとす

る一郎。

「あ、いや、取りあえずいつもように大陸で魚を売ったら、家に帰ろう。それから少女の処遇を考えよう。」

「わかった。じゃあ船の方向を転換させるぜ。」

「ああ、頼むよ。」

先ほどまでに停まっていた船が旋回して、一気に加速する。あたりに女の面影はなく、やはりただ海原があるばかりである。先ほどの出来事が脳裏に焼き付いていた竜也は、この単調な景色との対照に一抹の寂しさを覚えるのであった。

「（それとも、やはりあの女にも理由があるのか？ あんなとんでもない女でも、何か病気にでもかかっているのか。何か子供を育てることができないのっぴきならない理由でもあるのか？ ……）
だったら一体だれがこの子を育てるっていうんだ…」（）

竜也の悩みとは裏腹に、船は停滞することなくまっすぐに進んでいった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3655z/>

海からの少女

2011年12月14日15時51分発行